

事例1-10 赤武酒造の移転先での生産再開と製品開発（岩手県大槌町他）

- 1 盛岡市の施設を借りてリキュールの生産を再開、復興への足掛かりとする
- 2 地元金融機関主催の商談会や各地のイベントに参加し、新たな販路を開拓
- 3 グループ補助金の採択を経て、新工場建設で新たな挑戦へ

事業の全体工程と現況



事業主体 赤武酒造株式会社

プロジェクト規模 300石（震災前：600石）

事業費 4億3,900万円（うち4分の3は経済産業省「中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業」）

(1) 事業の概要

岩手県大槌町は、津波とこれに起因する火災により、壊滅的な被害を受けた地域のひとつである。この地で明治29年に創業し、清酒「浜娘」の蔵元として親しまれてきた赤武（あかぶ）酒造（株）も、酒蔵と事務所のすべてを失う。代表取締役の古舘秀峰氏は、8名の従業員に対して一時休業を告げたが、操業再開のメドはまったく立たない。しかし、親類を頼って盛岡へ移り、再会した諸先輩や取引先と話をする中で、酒蔵再建への思いが沸き上がった。



赤武酒造製品ラインナップ

平成23年7月、盛岡市が所有する施設等を被災企業に提供していることを知る。さっそく相談したところ、一時的にはあるが、盛岡市新事業創出センター内の工場を借り受けることができた。日本酒を醸すには特別な設備が必要だが、赤武酒造は「リカースイーツ」と名付けたリキュールのブランドを持っている。その生産設備は日本酒と比べてシンプルなため、復興への第一歩は、生乳、山ぶどうなどを使ったリキュールの製造から踏み出す。ただし、震災前の赤武酒造の顧客は大槌と釜石が大部分だったため、販売先は新規開拓が必要だ。当初は苦戦したが、徐々に地元系スーパーチェーンや道の駅などの新規取引先を開拓する。さらに県の紹介で、アロニア、りんごなどの生産者とも製品開発に取り組み、100%岩手県産のリカースイーツを発売。好評を得ることで当面の資金となる収益をあげるとともに、酒蔵復活への足掛かりを得る。

その後も古舘氏は、県内の清酒工場を回り、赤武酒造を受け入れてくれる蔵を探す。誰もが親身になって話を聞いてくれたものの、提案されるのはOEM生産による協力まで。「自分で手をかけて酒を醸したい」と願う古舘氏の思いは、なかなか受け入れられなかった。しかし、5社目に訪れた桜顔（さくらがお）酒造（株）は、被災地を支援したいという思いから、古舘氏の要望を受け入れる。清酒「浜娘」は、桜顔酒造の蔵に赤武酒造が加わる形で11月から醸され、12月に発売された。

この間、自分の酒蔵を再び持つことは難しいと考えていた古舘氏に、県の酒造組合からグループ補助金制度を紹介される。被災した他の酒蔵と協力して申請したところ、2度目の申請で採択。再建地は大

榎町を真っ先に考えたが、震災前の場所は土盛りし新しいまちづくりの中心になる計画があり、工場建設は難しいと判断。盛岡市に相談し、市内で借地契約が可能な用地の紹介を受けた。平成25年春、新工場完成とともに「浜娘」の新たな挑戦が始まる。

(2)プロジェクトが直面した課題と解決のポイント

1 盛岡市の施設を借りてリキュールの生産を再開、復興への足掛かりとする

酒類の製造には製造所所在地の所轄税務署長の免許が必要なため、製造再開にあたっては新たに盛岡税務署に免許申請を行った。大榎で働いていた従業員の再雇用はかなわなかったが、盛岡で新たに採用した若い社員とともにリキュール製造に取り組んだ結果、リカースイーツ（いわて山ぶどう）は、平成23年度いわて特産品コンクールで「がんばろう岩手特別賞」を受賞。さらに、道の駅「遠野風の丘」を運営する遠野ふるさと公社と連携して開発した「遠野完熟りんご」、「遠野フレッシュトマト」など、100%岩手県産にこだわったリカースイーツを新たに販売している。



盛岡で新規採用した若い社員たちと

2 地元金融機関主催の商談会や各地のイベントに参加し、新たな販路を開拓

日本酒業界全体で市場の縮小が続く昨今、新たな販路開拓は容易ではない。古館氏は、行政や地元金融機関が主催する商談会に積極的に参加し、販売店開拓に奔走する。平成23年末から翌年にかけては、東北復興支援を掲げるイベントが各地で開かれた時期。機会があれば東京で開催されるトレードショーにも出展し、3日間で約300名ものバイヤーと名刺を交換した。平成24年4月には、岩手県酒造組合が推進する「オールいわて清酒」の企画を取り入れた日本酒を「いわてデスティネーションキャンペーン記念限定酒」特別純米酒「浜娘」桜ラベルと名付け、数量限定で販売した。支援の機運が一段落した平成24年の年末は予想以上に売上げが落ち込んだが、「浜娘の会」と銘打った飲食店主催のイベントは、盛岡市内はもとより東京でも開催されるなど、顧客は徐々に増えている。

3 グループ補助金の採択を経て、新工場建設で新たな挑戦へ

岩手県内では、内陸部の酒蔵でも壁が崩れるなどの被害が出ていた。岩手県酒造組合では、中小規模の酒蔵を中心にグループ補助金の申請を勧め、サポートを行う。赤武酒造は第3次募集で採択され、工場再建費用の4分の3にあたる補助金を受けることができた。建築資材の高騰、職人不足等、再建に向けて乗り越えなければならない課題は山積みだ。それでも古館氏は、これまで支援してくれた人々に、自ら手をかけた酒を1日でも早く届けることを目指して、酒蔵再建に取り組んでいる。

コラム：多くの人から受けた支援を、いい酒を醸すことで恩返ししたい

日本酒の原料は、基本的には米、酵母、水の3つである。赤武酒造の酵母は醸造試験場に保管されていたため、無事だった。けれど「水」は、新しく酒蔵を建てた土地で調達するしかない。つまり、「浜娘」の銘柄を復活させることはできても、同じ味わいを醸すことは難しい。古館氏は、桜顔酒造の蔵を借りて復活させた平成23年製の「浜娘」に「壱歳」と印したラベルを添付した。平成24年に醸したものは「弐歳」。そこには、初心に返って一から自分の酒造りに取り組もうという思いが込められている。

「この2年間ほどたくさんの人に会い、酒を酌み交わし、思いを語り合ったことはありません。以前は、先代から引き継いだ酒蔵を潰したくない、という思いだけで酒造りを続けていた面もありましたが、失ってみて初めて、自分がどれほど酒造りを愛していたかに気づきました。グループ補助金が採択され、もう一度自分の酒蔵が持てると思ったときは体が震えました。その思いを忘れず、皆さんに愉しんでいただけるいい酒を醸していかなくては、と気を引き締めています」。